

二 『川崎幾三郎翁傳』より

第十六 幾三郎翁と

秀才教育土佐中学校

一、川崎翁は秀才教育の実行者

槍持槍使わず、金持金使わずの諺通り、たまるほど汚くなるのが俗人の常だが、川崎翁は全くこの反対だった。翁がよく集め、よく散じた事は、前章翁の社会事業の条で縷々述べた通り、翁の一代に關与した社会公共事業とそのため散じた金額は、恐らく県下全富豪の筆頭であろう。イヤそれよりも翁一流の陰徳がどの位あつたか分からぬ。系図を調べねば分からぬような遠縁の者が困っておると聞いては、扶持米をやるし、大火の時には一般の見舞金以外、顔見知り位の罹災者へもきつと金一封を贈っている。こうした陰徳は義理や名誉心でやれるものではない。矢張りこれは翁の天生の仁愛の精神から出たもので、川崎一門のお家流とも云える。

要するに川崎翁の寄付救恤の動機は、富を以て屋を潤し、最賈の縁者を潤したのみならず、広く社会一般を潤そうとしたのだ。しかも名聞嫌いの翁は、晴れがましい寄付は他動的に金は出すが、それよりも隠れた所で、神と共に陰徳を積む事に専念した。ツマリ川崎翁の寄付の場合も、その事業と同様、殆ど他動的で、言わば据膳を食ったに過ぎない。

土佐中の寄付は翁の生前死後を通じて、総計五十万円を出しておる。此の巨費を投じた育英の大事業も、翁の諸他の寄付と同じく、全く他動的だった。これは川崎翁のみではない。盟友宇田氏も「宇田友四郎翁」が伝えているように、この寄付ばかりは藤崎市長の発案であつて、宇田氏は喜んでこれに応じはしたが、要するに受身の寄付である事は川崎翁と同一であつた。

「土佐中」成立に至るまでの経過は、宇田伝で詳細を伝えておるから、ここには重複を避けるが、只一つの寄付に対する川崎翁の立場だけは詳細説明の必要がある。

一体「土佐中」の秀才教育なるものを、誰が最初に案出し、その案が又誰の口から川崎翁の耳に入ったか、そんな詮索はさておいて、この秀才教育という事と川崎翁の精神なり経歴とどういふ関係があつたかが問題である。もしもこの川崎翁の寄付が、単に寄付のための寄付であつて、育英事業、ことに秀才教育に対して何の理解も同情もなく、ただ親友の勧めだから寄付すると云う程度のものであれば、川崎翁の五十万円の寄付も、それは単に凡庸の出資者というだけで、精神的意義の大半を喪^{ウシナ}う結果になるが、しかし今翻^{ウシナ}つて翁一代の業績より観察する時、翁は壮年時代より育英事業に対して深い理解があり、しかも秀才教育は十数年にわたつて、翁自らこれを実行していたのだ。それなら何故翁自らこれを唱道しなかつたかと云う事は、それは翁の平生のやり口でも分る通り、万事表面に立つのを厭がる翁としては決して無理のないことで、翁は心中秘かに秀才教育の機が熟して、識者の主唱するのを待っていたのに相違ない。だか

ら形式からみる限り、これはもとより他動的に相違はないが、翁の如く秀才教育に理解があり、而してこれに対する精神的準備が完成し、しかもこれを助長するのに必要な一切の条件と資格とを具備した翁の如きは、世上往々見うけるところの無理解の出過ぎ者に比して、勝ること実に万々、その人格の差たるや尋常ではない。

二、川崎翁の家庭教育

川崎翁は明治二十年代から、晩年に至るまで、教育事業に関する寄付は、実に枚挙に暇がないが、しかしこれは翁だけの自慢にはならぬ。只一つ翁が自ら幼稚園を開設し、自らその園長となり、本県における私立幼稚園の始祖となった事は、川崎翁が財界に対すると共に、教育界に対して深き理解のあった証拠である。

更にまた、内輪の人の話を聞いても、川崎翁が広義の教育事業について、如何に深甚なる興味を持っていたかが分かる。今左に二三の実例を挙げてみよう。

川崎翁は三代幾三郎氏即ち養嗣子庄太郎君の幼年時代など、実に厳格に躾けたもので、富豪の子として甘やかしては碌なものにならぬというので、賢夫人と共に川崎のお家風のスパルタ式硬教育を施した。例えば小遣の如きも、一日分何銭と定めて、しかもそれは翁が特に土佐銀行から持ち帰った五厘銭で、翁の手ずから渡したそうだが、こうした教育

上の苦心は報われて、その結果、大川崎翁の後継者としての故三代幾三郎氏は、あの通り忠直謹厳な、いわば川崎家の型にはまり切った立派な人格者にまで育ったのだ。

川崎翁はあの位徹底した理財家で、必要な金は万金も惜しまぬ代り、何によらず無駄使いを戒めた。そして家庭教育において自らその範を示した。その一例として翁の小遣帳など全部薄手の真草紙だったが、それへ先ず薄黒で書く、その上へやや濃く書く、三度目には裏返して使う、そしていよいよ用済みになると、キレイに截ってコヨリに捻った。此の仕事は少年時代の富三郎氏に命ぜられたが、何しろこのコヨリ振りは十年一日の如く、毎晩の行事なので、終にはコヨリ振りの名人という隠し芸が出来る程に上達したそうだ。こんな工合に何不自由のない豪門の子弟に、身を以て節約の範を示し、実物教育を授けたところに、川崎翁の徹底した教育方針が伺われる。

これも同じ勤儉教育の実例だが、乗出邸が新築中の大正三四年頃、川崎翁は毎朝土銀出勤のついでに、北奉公人町の自邸から、必ず普請場へ寄り道した。或朝の事、翁が普請場を見廻っておる時、庭の松の木へ括りつけてある一匹の小犬を見付けた。翁は傍に居た監督の熊澤清馬君に、この犬はどうしたものかとたずねた。熊澤君がそれは私が大工に貰ったもので、内で飼うつもりですと答えると、翁は例の砕けた調子で、

「そうかよ、犬もエエが犬は卵を産まんぜよ。鶏を飼ふて卵を取った方がようはないかよ。私なら鶏を飼うが。」

翁の言葉は短いが意味は深長だ。熊澤君は成程と反省して、犬は即日大工へ戻し、その代りの養鶏を始めた。そして

此の日から同君は飯より好きな犬道樂はサツパリ止めてしまった。

三、得月楼は秀才の掘り出し場

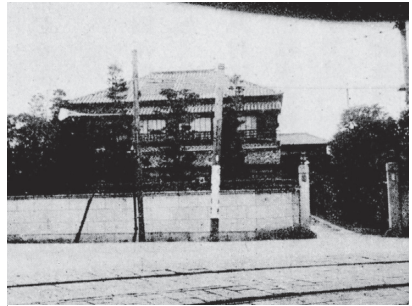
川崎翁に限らず、明治三、四十年頃の名士たちは、得月や鏡水楼を俱樂部代りに、よく出入りしたものだが、川崎翁のためには、得月楼は秀才の掘り出し場になっていた。

翁は酒盃を手にしている時で気の利いた人物を見付けると、「どうぞよ。此方コッチへ来て一緒にやらんかよ」とやる。相手が無名の青年でも手を取らんばかりにして献杯をやりとりする。いろいろ話すうちに相手の才識力量を見分けるし、又教育もする。そしていよいよこれならといふ見据えがつけば、直ちに登用して川崎産業陣営の一部将として腕一杯の仕事をやらせた。即ち川崎翁は酒間において英才を発見し、更にこれに磨きをかける意味で、献酬談笑の間に真の秀才教育をやったのだ。さればこそ翁は一代にあの位手広く百貨店式の多角経営をしながら、しかも尚それらに要する人材を遺憾なく翁の手許テドへ集める事が出来たのだ。

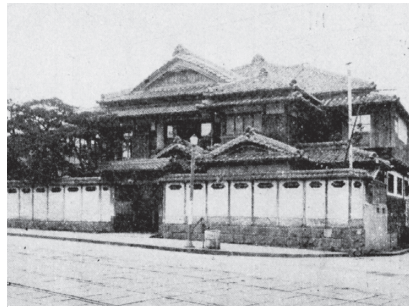
川崎翁も亦他の大事業家の例に漏れず、趣味も道樂も生活の一切を、自己の事業に利用する事を忘れなかった。一ケ年間に三百余日を得月に居たと云われた川崎翁は、酒間に同志と懇談の外、こうした人物の掘り出しをやっていたのだ。



得月楼本店



得月楼中店



鏡水楼友の家

四、川崎邸内の秀才教育

川崎翁は更にまた自邸において、十数年間にわたって切実なる秀才教育をやっていた。すなわち翁は貧家の秀才に学資を給して、其の学業の育成を助けたのだ。

翁の補助を受けて成業した者は、十指を屈するも尚余る。何れも今日成功して社会の上層部に立つ紳士として世間に対する面目もあり、また川崎家として旧恩を売る如き誤解を受けても困るから、ここに詳細の発表は遠慮するが、某氏には明治三十二、三年頃中学生当時から高等師範卒業まで学資を支給し、尚かつ同氏が京都府立某中学校へ赴任の際には早速旅費等を送金しておる。この人は内地で中学校長を歴任の上、現在は朝鮮で督学官を務めているそうだ。

川崎翁の秀才教育は当時有名だったとみえて、横山又吉氏や高原伊三郎氏等から、度々書生を頼まれておる。翁はこ

れ等の書生を自邸に置いて衣食を給し、学資や小遣い銭を与え、参考書はもとより、年何回かの修学旅行などには、何時も過分の金を渡した。また翁は自邸で面倒を見た書生が勤め上げると、必ず就職の世話をしてやる。そして其の際饒別として屹度金一封を与えておる。いくら長者の川崎翁でも、義理一遍でこんな行き届いた世話ができるものではない。

五、秀才教育を案出した藤崎市長と川島助役

さて、「土佐中」の創立には、兩名の出資者以外に、沢山の援助者があった。その一人はかの一圓正興氏と並んで、名市長と謳われた藤崎朋之氏だった。藤崎氏は川崎翁とは莫逆の親友で、山林製材業などで、たびたび共同経営をやったし、翁が土佐銀行頭取の初期から中期にかけて、同氏はしばしば土銀と三菱との連絡係を務めた関係もあり、川崎翁の真骨頂を最もよく理解していた心友の一人であった。

大正八年白洋景気（第一次世界大戦景気）のまさにたけなわの頃、藤崎市長は親友川崎翁と宇田氏が一攫数百万金の富の一部を最も有益に散ずるための一大社会事業を企てて、一つには以て両翁の晩年を飾るべく、一つには以て永久に県下の公益に資すべく、いわゆる一石二鳥の名案はないかと深思黙考の上、ハタと両手を打ち是なる哉是なる哉と胸中ひそかに成案を得た。



川島正件氏



藤崎朋之氏

そして直ちに助役川島正件氏を招いて、其の意中を告げた。要はこの好景気の絶頂に当たって、翁と宇田氏に相当巨額の寄付をさせたいというのだ。ここに藤崎市長の成案というのは、ある特殊中学校の設立だった。今日土中の標榜するような鮮明な「秀才教育」の意識にまで固まっただけではなかったにせよ、この二人の最初の会談によって、秀才教育の萌芽は生れ、将来秀才教育に向って進むべき大体の方向が決定されたのだ。川島助役は直ちに活動を開始した。川島氏は教育畑で叩き上げた人だけに、類を以て集まる（類は友を呼ぶ）の諺通り、当時高知市の視学（教育監察官）で、英才教育の一権威である西山庸平氏並びにこれまた教育に理解ある池本市会議員と三人が鼎座に座って種々案を練った揚句、寄付の目的は英才教育の私立中学校とし、寄付金額は六十万円ないし百万円とした。最初藤崎市長と川島助役によって作られた骨格だけの原案はここに初めて充分の肉づけが出来て確定案に近い本当の成案を得た次第だ。三人会議の結果は、川島助役によって藤崎市長に報ぜられ、藤崎市長の承認を経て、ここにいよいよ確定案が出来たのだ。川島助役は市長の内意を含んで、まず宇田氏に会って、その意中を打診したところ、そういう寄付なら文句なしで出さうという。次は先輩格の川崎翁だが、此の慈善翁には、相談など持ち出すのはかえって失礼に当たる位だ。義を見ては為さないとこの無^{ホド}い本県実業界随一の仁者が、どうして尻込みする道理があるろう。これは事後承諾位のつもりでもり、むしろ黙って事を運ぶのが、眞^{ホド}の意味で川崎翁に敬意を表することだと分かったので、翁の方はもう大船に乗ったつもりで、いよいよこの運動の表面化に着手する事となった。



池本浩静氏



西山庸平氏

かくして秀才教育土佐中学校の計画が、ここに黒幕を切って落として、いよいよ華やかな脚光を浴びる事となったのだ。

六、交渉委員に北川信從のぶより氏を頼む

さて愈々黒幕が落ちて、表立って交渉に当たる立役者はと云うと、何さま百万円近い大事業だから、中央の然るべき人物に頼まねばならぬ。誰か彼かと人選の結果、白羽の矢は新潟県知事を辞して当時閑地に居た北川信從氏に立った。北川氏は安芸郡北川村の出身で、豪放磊落の令兄忠惇氏と対比すれば、誠実剛直をもつて、はやくより官界に雄飛した海南の一偉材である。令兄忠惇氏は川崎陣營の一部将として、先には田野、奈半利方面に製材会社を起こし、また後には川崎翁の発起した大東漁業の社長にもなり、翁とは前から懇意だったし、令弟信從氏とも勿論面識の仲であった。川島氏等が三顧の礼を以て依頼したので、アマノジャコ（つむじ曲がり、アマノジャク）で通った北川氏の重い御神輿もヤツト上って、終に正式交渉委員として帰県する事となった、土佐へ帰った北川氏は川崎翁と宇田氏とへ前後して、予算額の最少限度である六十万円の寄付を持ち出した。それも決してしかつめらしい談判でなく「オンシが、オラが」の打ち解けた戯談ジョウタン話の中シに万事すらすら運んで、両氏は快く三十万円ずつの寄付を承諾した。この決定について某氏に宇田氏が直接語った話では、川崎へは宇田も賛成だから三十万円出せと云うと、ソ一カ、ヨシと一言のもとに決定し、其の足で宇田氏を訪ね川崎も決ったぞ、ウンシも出せとこれもたちどころに決定した。北川にはヤラレタカノ一シと、寄付金決定の裏面にはこうしたいきさつがあった。ここに於いて「川崎宇田財団法



北川信從氏

人寄付行為」の決定となり、正規の手続きを経て出願の上、いよいよ大正九年九月二十四日に許可された。

尚、右財団法人成立の経緯に関し、参考のため「土佐中」の沿革概要から抜粋すると、「故川崎幾三郎及び宇田友四郎の両氏は夙に県下のため、私財を投じて公共事業を經營せんとするの意あり。大正七、八年のころ、かねて昵近なる北川信從氏に、其の事業の選択を委任せり。爾來北川氏は審思熟慮、永久に且つ普遍的に両氏の意志を貫徹するは、教育事業に如くはなしと断じて、之を両氏に通ぜしが、両氏亦大に之を賛し、其の資本六十万円を提供し、十万円を設備費とし、五十万円を基本金とする財団法人として之を管理し、予科を付設する中学校を設立することを協定せり」。

七、奇才天才の育成が目的

宇田氏は三十万円が確定した時、昵近の一人に云ったそうさ。

「最初十万円の積もりが、北川の話で三倍になった」と。此の話の真偽はともかく、土佐中の誕生には、北川氏は確かに生みの親の一人であった。この北川氏は初代校長の三根圓次郎氏に向って、土佐中創立の主旨として左の如く語ったそうさ。

「土佐は不思議にも、古來天才奇才を出す事が少なくない」と



三根圓次郎氏

思う。それで教育のしようによっては、先人に劣らぬ偉人を輩出せしめることが出来ると思うから、シツカリやって貰いたい」と。

右は誠に含蓄のある言葉だ。この一語によって土佐中創立の趣意は、遺憾なく指摘されておる。実際北川氏の云うように、土佐は古来天才の国である。中には人格上欠点はありながら、——その為に末路の惨憺たる者もあつたが、——一方面に傑出せる人物を輩出することは事実である。人格の完成をゆるがせにしないのは勿論だが、一面右の天才的素質を長養し助成して、薩長土と呼ばれて、奇才天才の簇^{むら}り生れたるかの維新の盛時を再現せんとするが、北川氏の意図であり、従つて土佐中の目的であらねばならぬ。即ち土佐中の目指す所は、則ち天才助長主義である。

此の天才尊重ということは、川崎翁としても、その終生の持論であつたから、土佐中の秀才教育には心底から共鳴していたに違いないのだ。川崎翁は前に屢々述べたとおり、いやしくも一技一能ある者は、努めて其の陣営に吸収した。そしてこれらを殆ど例外なしに、各方面の部将に任命しておる。川崎陣営が要求するのは必ずしも無キズの人格者ではない。川崎陣営各方面の必要を充たす才能であり、創意であり、力量であつた。ツマリ川崎翁の切実に求めたのは、天才的人物だつたのだ。

更に川崎翁その人をみるに、人格上いささかの欠陥もない世にも稀なる一大天才であつた。翁が如何に不思議の頭脳の持主だつたかは、翁が在宅の際、日誌をつけながら対談流れるが如きをみても充分推察できるが、翁は更に手紙を書

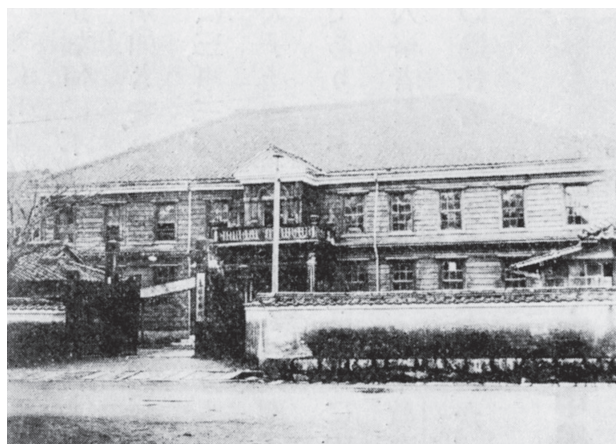
き対談をし、暗算をもして、一時に三事三芸をやって、しかもそれが三つ共、完全に出来たと云うから、これはたしかに聖徳太子そのままだ。とても人間業とは思えない。かくの如く川崎翁は天下稀にみる大天才でありながら、翁には天才に付きものの性格上の欠点がいささかもなく、あの通り円満至極の人格者だったことは、秀才教育——天才教育と結局は同意義——の創始者として実に無上の適任者と云うべきではなからうか。

八、土佐中學校の出発は川崎家の控家

今、川崎翁の日誌によると、大正八年七月二十四日、北川信従、川島正件両氏の世話により、中学程度の秀才教育学校設立のことを計画し、翁と宇田友四郎氏は各自金三十万円ずつ出資する事を本日発表すとある。恐らく当日土佐中の創立を新聞に発表したであろう。

月を越えて八月十日には川島正件氏の来訪があった。寄付額三十万円中一千円を同氏に手渡しておる。

翌大正九年一月十四日、新潟中学校長三根圓次郎氏は、土佐



土佐中學校仮校舎

中校長として就任し、同年二月八日着任、開校準備に努め、同月二十四日付を以て、私立土佐中学校及び川崎宇田財団法人設立認可となり、同年四月十六日日本科入学式を挙行して、生徒二十八名に入学を許可し、市内帯屋町川崎翁の控家（元県立第一高等女学校旧屋）で、その授業を開始した。

大正九年五月六日、川崎翁並びに宇田氏連席の下に、予科入学式を挙行し、第一学年十名第二学年十五名に入学を許可して予科の授業を開始した。かくして秀才教育は其の第一歩を踏み出したわけである。

九、六拾万円の寄付金に七朱の利子

さて、いよいよ土佐中の諸機関が完備して、其の活動を開始すると共に、川崎翁は宇田氏と相談して寄付金六十万円の処置を講ずる事となった。当時翁は土佐銀行の頭取を辞して、表面は一切の銀行と無関係になっていたが、何しろ明治三十二、三年頃から、二十有余年間、本県の銀行王——事業王でもあったが——として県下全金融界に君臨していた翁の事だから、土佐銀行引退後も尚かつ隠然として本県銀行界の最長老だったが、ことに宇田氏を頭取とする高陽銀行では、川崎翁は大御所として隠然たる勢力を有していた。そこで翁は宇田氏と熟議の上、土佐中への寄付金六十万円は全部高陽の預金とし、出来るだけ高率の利子を付けて学校の便宜を計る事とした。土佐中に対するこの特別の優遇こそ、実に両翁の温い親心とみるべきであろう。

大正九年五月二十四日、即ち土佐中の入学式の直後、翁及び宇田氏は先ず高陽銀行に於いて、各々三十万円ずつ合計六十万円の預金を土佐中名義に振り替えた。そして其中五十万円を定期預金として、一ヶ年七朱（七％）の利で預かる事とした。残余十万円中、かねて翁等の土佐中への貸与金六千円を差引いた残金九万四千円を小口当座として五月二十四日より五月末まで七朱の利子、六月一日より日歩二銭として、これら全部を土佐中へ寄付の手續を完了した。そして、これ等定期と当座と二通合計六十万円也の預金証書は、両翁から改めて川島正件氏に手交した。何と行き届いた温い思い遣りのある扱いはないか。仁心溢れるが如く、しかも県下第一人の定評のあった大理財家川崎翁にして初めてこの事が出来たのだ。

一〇、校舎の新築と川崎翁の銅像

土佐中の授業は川崎翁の控家でやっていたが、いよいよ校舎の新築に着手する事とし、まず校舎の敷地を探した結果、第一の候補地を市外江ノ口としたが、これは或る故障のためとり止



建設当時の土佐中學校

めとなり、大正九年七月に至り、にわかには潮江村に変更再度調査を開始し、同年十月十日同地に確定し、十二月二十七日敷地五千二百七十七坪五合の購入を完了した。

翌十年二月十五日埋め立て工事を開始のため地鎮祭を行い、十六日から起工した。

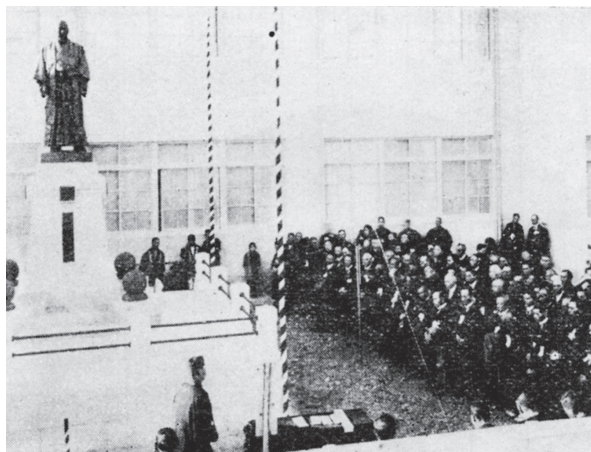
同年四月入学式を挙行、本科第一学年十四名、予科第二年六名、同一年十三名の入学を許可した。そして同年八月に至り、いよいよ建築工事に着手した。

翁の日誌には工事着手後二ヶ月の十月二十四日、建築費中へ、棟梁長瀬から翁に三万円の請求があり、うち八千円を学校すなわち財団法人が出し、残り二万二千元を川崎翁と宇田氏が二分して一万一千円ずつ出しておる。これは建築費不足のための追加寄付である。

川崎翁としてはこれが土佐中との最後の交渉であつた。何となれば翁はこの一万一千円の追加寄付をして二週間後の十一月八日に発病し、中一日おいて十日に逝去しているからだ。

川崎翁の没後北川信従氏は、宇田氏と計って、かねて土佐銀行関係者に依頼して拠金し建設準備中の翁の銅像を、土佐中校庭内に建設する事とし、関係者と協議の上決定した。

尚、寄付金については、翁の没後、正確にいうと大正十一年三月六日、松子未亡人の手から、亡夫の遺志を継ぐ意味で、十五万円の追加寄付をしたので、前記の三十五万円と合わせて川崎家の寄付総額はここに五十万円に達した。然るにこの没後十五万円の寄付のわけをいうと、或日のこと宇田友四郎氏が



川崎翁銅像除幕式

川崎邸を訪れて云うには、どうも寄付金が不足するらしい。それで私の考えではお互いに更に十五万円ずつ三十万円の追加寄付をしたらどうか。私も十五万円出すから、川崎家でも同額の追加を願いたいと云ったが、これは誠に筋の通った話で、川崎翁が生きていたなら論を待たず賛成するに決まっている事なので、未亡人は直ちに賛同して寄付の決心をしたので、ツマリ宇田氏の話が原因となっているのだ。

大正十一年三月末日、校舎新築第一期工事は落成し、帯屋町から新校舎へ移転した。

同年十一月十九日、川崎翁銅像除幕式挙行。翌十二年開校記念碑を建設、越えて大正十三年四月二十七日理事長北川信從氏逝去、同三十日全校で靈柩を見送った。これより十余年を経て校長三根圓次郎氏逝去し、後任として愛知県立第一中学校長青木勘氏が本校校長として就任し、現在に及んでおる。

一一、土佐中の設立趣旨と三根校長

初代校長三根圓次郎氏は、流石に北川信從氏が推薦しただけあって、当時の中学校長中、一頭地をぬいた人物だった。人格学識兼ね備わり、県下の校長会議では、何時も三根校長が座長格で歴代の知事が却って頭を抑えられていたと云われる位だ。生徒に対しても寛容・厳格の按配よくできたので全校の生徒からは慈父の如く慕われていた。土佐中の今日あるは、主として此の名校長の施設訓育（経営と教育）が当を得たお蔭と云ってよからう。このころ三根校長の胸像建

設の議論があるのもつともだ。

この名校長によって作られた土佐中設立趣意書は、簡にして要を得ておる。趣意書に曰く「本校は大戦後、国運の進展に伴う中等学校内容充実の趣旨により設立されたものにして、中学校令の示す所により、中堅国民の養成を目的とするは論を待たずといえども、一面また高等教育を受けるに十分なる基礎教育に力をいたし、修業後は進んで上級学校に向かい、他日国民の翹望ぎょうぼう（大いに期待）する人士の輩出を期するものなり」と。

右の趣意書を更に一言に要約すれば、土佐中は大学の理想的予備門というのだ。即ち日本国民中優秀なる指導階級を作るのが目的である。千羊の皮（ありふれた皮）よりは、一狐裘こきゅう（狐の脇の下で作った貴重な毛皮）を作るのが、思うに本校の使命である。

一一、土佐中の五大特色

本校が秀才教育を標榜する特殊な学校であるだけに、土佐中は普通中学校に比して、どこか際立きわった特色がなくてはならぬ。

この点に関して土佐中では、本校の特に留意せる点として左記の五項目を挙げておる。

- 一、個人指導に重きをおき、教授能率の増進を計る事
- 二、天賦の能力を發揮し、自発的修養に努めさせる事
- 三、堅忍剛毅（忍耐力と強い意志）の性格、健全なる思想を養成する事
- 四、責任を重んじ好んで勞に就く習慣を養う事
- 五、運動を重んじ、養護上の注意を忘れず、以て体位の向上を計る事

一と二とは天才教育の方針を示したものだ、三以下は普通中学校の教育方針と大差なく、質実剛健の気性を養成し、体位の向上を奨励したもので、これによって天才教育の弊害を防ごうと試みた事がよく分る。

一三、天賦能力の發揮と自発的修養

前記のごとく本校は、個人指導に力点をおく結果、学年編成の如きも、普通中学校と異なる特色を有し、一学級の定員が普通よりずっと少なくなっている。則ち本校の学年編成は、本科第一学年に入学させる者のほか、小学校五学年修了者の中から選抜せるものより成る修了年限一ヶ年の予科を置き、定員は予科十五名、本科は第五学年を除く外、約三十名の規定である。

本校は上記の如く天賦の能力を發揮し、自發的修養に努めるため、個人指導に重きを置く結果、その教授にも手心を加へて、それ相応の工夫を要するは勿論である。

則ち本校の教授に当たっては、第一に生徒各自の能力と学力に応じ、教科書以外に材料を工夫し、個人的指導に努める事、第二には各教室に辞書を豊富に備へ、自学自習の習慣を養成する事、第三には、第四学年の第三学期においては、英、国、漢、数の受験科目はほぼ普通中学校卒業程度の学力を有せしめる事等、要するに各自能力に応じて、自学自習、自ら刻苦精勵して、最短期に、最多量の受験能力を充実させることを理想としておる。

一四、文武兼備の理想

本校においては、かくの如くその設備に、その訓育に、その教授に、あらゆる方面より、上級学校に最優秀の成績を以て進出すべく、一切の努力をこの一点に集中しておるが、然しこの傾向は往々にして智育偏重の弊を生み、片々たる軽薄才子を生ずる事があるに鑑み、本校に於いては、体育と訓練に重きを置き、智徳兼備の健全なる国民の養成を理想としている。

故に体育においては、第一、各種の体育施設を完備し、それぞれの体質に応じて、全生徒に適當の運動をさせる事、

第二、体操の教授時間を普通の中学規程より、一時間多く課する事、第三、毎月末において身体の状況及び体力を検査し、養護上遺憾なからしめる事、第四、毎週各学年一回一時間の課外運動を行う事、第五、第三学期において第三学年以下全部に武術寒稽古を課する事、第六、運動の際は裸体を奨励し、暑中休暇が終わって開校の時黒ん坊会にて、その等級を表彰する事、第七、毎日放課後任意に運動競技を奨励する事。

体育に関する規定としては、まことに微に入り、細を穿ち、恐らく県下の普通中学校に比して勝るとも、決して劣らない体育の奨励ぶりだ。

しかも本校体育の特徴は、学科の個人指導と同じく、生徒各個人の体質に応じて、それぞれ適切な運動を行わせる点にある。ことに普通中学校の各学期の体格検査に対し、本校では毎月末に身体並びに体力の検査をする。更にまた裸体の奨励と黒ん坊の表彰の如き、理想的健康法である自然生活の推奨をするなど、恐らく県下にその比を見ない一大特色というべきだ。

かくの如く本校が体育に注力するにも係わらず、ある一部の評者からは、土佐中は主智教育の結果、生徒の欠点は、大体が文弱で、その性格は個人的、孤立的であり、体質も薄弱だという非難がある。これは要するに単に秀才教育という名だけ聞いて實際を知らない者の云うことだ。万一本校生徒にかかる欠陥があるとすれば、体格と勇気をやかましく云う陸軍士官学校や海軍兵学校や幼年学校の試験に、今日まで連続的にかつ最優秀の成績をもって合格の出来る筈はな

いのだ。

論より証拠、左に掲げる「中等学校身体検査比較表」において、本校生徒が県下及び全国中学校生徒に比して、身長、体重、胸囲の三拍子揃って、如何にすぐれているかを見れば、本校生徒を文弱などとは義理にも云えまい。

年令	学校別	身長	体重	胸囲
十二年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一三七、一 一三七、五 一三六、一	三一、六 三一、九 三〇、八	六八、五 六七、七 六五、五
十三年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一四五、四 一四〇、七 一三九、四	三六、一 三四、七 三三、一	七二、八 六八、三 六六、五
十四年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一五一、五 一四八、〇 一四五、三	四三、〇 四〇、二 三七、五	七七、五 七二、一 六九、九
十五年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一五六、九 一五三、七 一五一、九	三七、二 四五、八 四二、九	七九、九 七六、五 七三、九
十六年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一六一、八 一五九、〇 一五七、一	五二、五 五一、一 四八、八	八四、五 八〇、三 七七、三
十七年	土佐中学校 県中学校 全国中学校	一六三、三 一六一、四 一六〇、三	五四、四 五三、五 五一、二	八六、五 八二、三 七九、九

右の比較表で一目瞭然である通り、身長、体重、胸囲共に、土佐中は、各学年を通じて最優秀だ。県下中学校の成績は全国の平均より勝っているが、本校に比べては全く顔色なしである。身長、体重共にそうだが、胸囲に至っては全然段違いだ。ことに十二歳より年を重ねるに従って、その開きが大きくなり、十七歳に至っては、全国中学校の平均より勝ること約七センチの差となって現われている。これは要するに本校の特色ある体育の効果、年を重ねると共に、いよいよ如実に顕われてきた証拠である。この一事を以てしても土佐中に健児なしということが暴論であることはもとより、およそそれとは正反対に、秀才教育の土佐中は、天下に冠たる健児の集団であることが確実な統計によって明示されているのではないか。殊に本校生徒が他校に比して胸囲の発育が著しいことは、理想的強健体として誇るに足るべく、要するに土佐中は、独り秀才教育において天下有数の特別校たるのみならず、体育においても全国屈指の中学である。実に文武両道の理想的道場とは思うに本校であろう。

一五、本校の徳育 — 級会長と週番の制度

本校は、智育はもとより体育においても上述の通り全国に覇をとる好成績を挙げているが、更に徳育においても、種々新機軸を出すのに注力している。則ち本校の訓練は智育、体育の場合と同じく、主として自治的であって、学校が干渉して、生徒が渋々従うのではなく、生徒の内部より、自発的に修養練習するのだ。この点諸他の中学校の訓育と余程その趣を異にしている。流石は三根校長が苦心発案しただけあって、理智の発達した秀才にふさわしいやり方である。

本校は毎月一回、第四学年主体の「向陽会」と称する自治修養会を開催し、この向陽会が中心となって、全校生徒は

風紀その他に関する希望を發表討論し、生徒各自に相警^{いまし}め、以て校規の振作向上を計っている。この向陽会は吉田校長時代の海南学校にあった四、五年生中心の談決会とほぼその軌を一にするもので、自治団体として最も微妙かつ活発な機能をもっている。

本校は清潔、整頓の習慣をつける事に意を用いている。則ち運動器具の整理監督一切の作業はすべて生徒の各係により、自治的にやらせる。第三に本校は報恩の念を堅くさせるための一端として、毎年一回全生徒が、本校創立の偉人たる川崎幾三郎翁の墓参をする。第四に無監視販売を実施して公德心の涵養に資する。第五に向上心を喚起させるため、閲覧室に県出身先輩の伝記、内外英雄の史伝、その他の修養書を具へ、生徒に随時閲覧させる等、あらゆる方面より自治的訓練を施している。

本校はまた、生徒の自治制度を徹底させるため、普通中学校の級長の代りに、級会長および週番の制度を設けている。週番は軍隊のそれの如く上級の生徒ではなく、互選による級会長が学級ごと指名したもので、週番には正副二名があり、その役目は主として、当該学級生徒の風紀向上に努めること。日常の勤務としては、毎日生徒の出欠を調査し出席簿に記入し、教室の備品を整頓し、掃除当番を割りあて、教師と生徒間の伝達に当たり、毎朝登校すると、教室廊下の硝子戸を開き、かつ教壇机上の塵芥を払い、そして教師が教室に出入り毎に、「起立、礼」の号令をする。

これをもても本校の週番の任務は、普通中学校の級長に等しく、その上位にある級会長なるものは、一見無用の存在

の如きだが、これは一級の徳望家、最優秀生として、週番の最高顧問であり、ちょうど市町村で助役、書記の上に、市町村長があるのと等しく、本校の真意は、生徒の在学中より自治に慣れさせ、卒業後、社会自治体の一員として、完全に其の任務を尽くさせるための準備として、かかる徹底的自治制度を設けたものに相違あるまい。

一六、自治制の中心「向陽会」

次に自治制度の中心機関である「向陽会」について一言すると、そもそも向陽会なるものは本校生徒が学力の進歩とともに、品性陶冶の欠くべからざるを痛感し、本校の伝統的自治精神に基づいて善良なる校風を樹立振作しようとするものである。すなわち本校生徒全部を以て会員となし、第四学年がその幹部となり、毎月一回会合し、幹部会において、予め主要事項を協議、実行要目の設定を経て、開会前これを公表し、一般の希望をも参酌した上、ここに最後の決定をするのだ。

更に進んで本会の徳目を挙げると、第一本会員は、至誠を旨とし、勤儉力行の風を養い、正義を貴び、職分を全うし、和衷協同、遜讓の半面、独立進取の氣象を養い、以て品性の向上を期し、専ら決議事項の実践躬行にこれ努めること等である。

そして「向陽会」趣意書の末尾に曰く「かくの如くんば本会の面目益々揚がり、校風の発展せんこと期して俟つべきなり。願わくは諸君これを彊めんことを」と。

一七、講堂の写真と扁額

本校は創立より数えれば、既に二十年を経過し、建築落成の大正十一年十一月より数えても十有八星霜を経て、その設備もすこぶる充実したが、報恩をもって主徳目とする本校は、その講堂に、本校の恩人として崇敬すべき故人の写真掲げてある。則ち川崎翁を筆頭に、元理事長の北川信従氏、元監事池本浩静氏、三根校長、宇田友四郎氏、元理事の安藝喜代香、中谷速水両氏、元監事曾和貞雄氏の写真を講堂の左右に掲揚してある。

また、講堂の正面には、本校創立の恩人北川氏の「養之如春」の扁額と並んで、郷土の大先輩濱口雄幸氏の「實踐躬行」の扁額が掲げてある。

卒業記念樹以外で、校庭に異彩を放つのは、三根校長の在職中運動場の周囲に植えた樟樹で、当時僅かに一、二尺だったが、今では二丈（約六メートル）になんなんとする大樹となって、鬱蒼として繁茂している。

現在の剣道場、すなわち元の柔道場の南側にプールを設けたのは、校舎新築の大正十一年九月中の事で、工費八千円

を投じて竣工した県下にその比を見ない設備である。他校が卒業生の寄付をうけて漸く設置したものとは異なり、流石は財源の豊富な本校だけに、一文半銭の寄付も仰がずに見事竣工しておる。



中谷速水氏



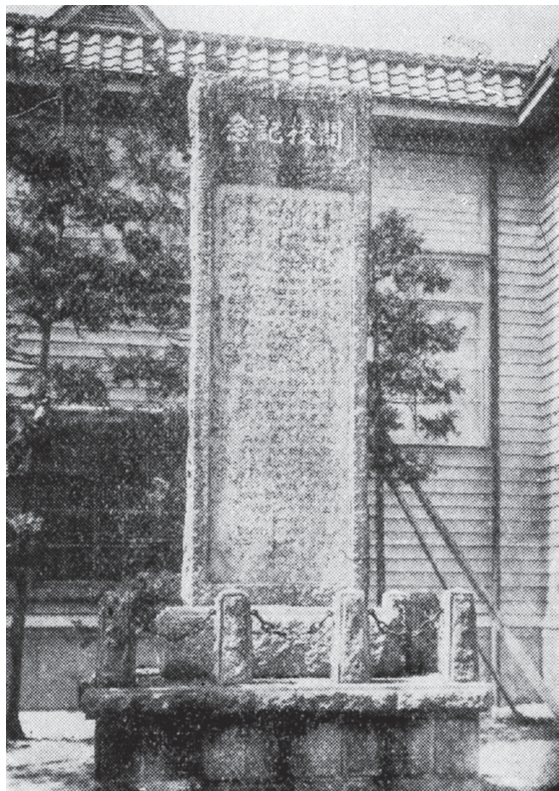
曾和貞雄氏

一八、開校記念碑と校歌

大正十一年本校新築と共に建設された記念碑は、大町桂月氏の作文によるもので、僅か三百字中に土佐中創立の意義が遺憾なく顕れている。

開校記念碑文

筆山ノ麓鏡川ノ畔、校舎巍々（高々）トシテ咿唔ノ声（書を読む声）雲ニ響ク、是レ土佐中学校ニ非ズヤ、教育振ヘバ国家栄エ、教育振ハザレバ国家衰フ、維新の際薩長土と並称セラレテ土佐ヨリ人材多ク輩出シタリシハ文ニ



開校記念碑

武ニ父兄ノ教育気分盛^{さかん}ニシテ子弟ノ向学心盛ナリシニ因^よラズンバアラズ、爾^{じらい}來^い(その後)教育振ハズ人材漸ク凋落^{ちようらく}セントス、川崎幾三郎宇田友四郎二氏大ニ慨スル所アリ、巨財ヲ投^なジテ土佐中学校ヲ創立、大正九年四月ヨリ仮校舎ニテ授業ヲ始メ、大正十一年十一月十八日本校舎ノ落成式ヲ挙ゲ、茲ニ在校ノ父兄相^あ互^ひリ碑ヲ建テ二氏ノ功ヲ伝ヘムトス、善^よイ哉^{かな}挙^なヤ(何たる快挙)、父兄既ニ恩ヲ知ル、子弟亦恩ヲ知ラザラムヤ、体ヲ鍛ヘ心ヲ練リ徳器ヲ高クシ知能ヲ大ニシ国家ニ尽スハ二氏ノ恩ニ報ズル也、二氏ノ恩ニ報ズルハ君国ノ恩ニ報ズル也

大町 桂 月 撰

松村 翠 濤 書

此の碑文の精神は、職員も生徒も出身者も、夢寐（寝ていても）忘れることが出来ない信条であることは云うまでもない。尚、本校の校歌は大正十一年五月、教諭越田三郎氏の作で、土佐中魂が残る所なく吐露されている。

校歌

一、

向陽の空浅緑

広きぞ己が心なる

大洋の岸物栄ゆ

伸ぶるは我の力なり

嗚呼幸多き天と地

自然の啓示かしこしや

二、

誠忠剛武並びなく

霊夢に入るか護国の士

達識叡智類いなく

自由を唱う不死の人

嗚呼先賢に績あり

三才秀で尊しや

三、

孕湾頭軒高く

兼山碑下に庭清し

協力一致誓いして

集う同袍意気強し

嗚呼勉めよや竭せよや

冠する土佐の名に叶え

四、

それ右文と尚武こそ

強者の競う栄冠ぞ

人道正義の理想こそ

王者の担う使命なれ

嗚呼吾れ享けん不朽の名

奮えや土州健男児

一九、国家に尽くすが何よりの報恩

これまでの記述によって明らかなように、本校の秀才教育は、つまるところ、日本国民の中堅層を指導し支配する優良且つ強力なる上層国民の育成を目的としたもので、個人指導を主とした合理的且つ自然的の教授、訓練によって学識、才能、品性、体格等あらゆる点において、普通中学校の水準より一頭地を抜きん出る所のいわゆる棟梁の材（リーダー）を造るを以て、その理想としている。而してこの目的達成のためには、何はさておき、第一の関心は、本校より上級学校への入学率だが、此の点に関して、未だ精確なる他校との比較表はないが、本校の入学率の素晴らしく、且つ入学試験に優秀の成績を挙げることは、今日已に定評がある。現に昭和十四年度高知高等学校へは本校よりの受験生十二名中

十名まで合格している。しかも中八名は四年生だ。殊に最も困難視される海軍兵学校ですら、毎年六七割の合格率だ。しかも其の合格順位の如きは、他校に比して著しく上位だ。流石は秀才教育を標榜せるだけあって、県下で入試のトップを切って進出するのは、何時も土佐中に決まっている。

今、本校の卒業生をみるに、十中七八は最高の学府を出ておる。試みに第一回の卒業生について、在校中の死亡退学を除く十七名中、帝大出は実に十五名に達し、二名は外語学校と高等商業である。更に前記の帝大出身の十五名中、最も多きは法学士の五名、次いで文学士の四名、医学士の三名で、法学士には鉄道省の副参事や、判検事や、関東州警部などがあるし、文学士には高等学校教授や中等学校教諭などがあり、理学士には高校教授や鉱山技師があり、医学士には病院長や軍医がある。第一回は大正十三年で、卒業後十五年、年齢にしても三十三歳で、正味十七名の卒業生中、高校教授二名、病院長一名、鉄道副参事一名を出しておる。その栄進振りの鮮やかなこと、流石に秀才の名に恥じないものがある。

今、本校の盛運を見るにつけても、川崎翁の逝去がかえすがえす残念だ。翁の六十七歳の寿命は勿論短命ではないが、翁より五歳年下の宇田氏が昭和十年まで永らえて、本校の卒業式に何回となく臨場した事から考えても、川崎翁にして仮に丸三ヶ年だけでも長生きしたなら、大正十三年三月の第一回の卒業を見て、安んじて永眠出来た事と思う。翁の病中最後の一言が「セメテ第一回の卒業生の進出が見たい」であった事から考えても、一生幸運に恵まれ通しの川崎翁に

も、この一点に遺憾があつたわけだ。川崎翁が幸運な人だけに却ってこの一事が、限りなく悼しい。

しかし死生は天の命、今更人力の如何ともできない所だ。故に本校生徒並びに出身者にして、真に川崎翁の恩義に感ずる者は、常に翁の墓前に額づくのみならず、かの開校記念碑の撰文の如く、体を鍛え、心を錬り、徳器を高くし、知能を大にし、國家有用の材となるべきである。これが即ち川崎翁の高恩に酬いる唯一の途である。げにや泉下（まろしじ）（あのみせ）に在る翁にして、土佐中今日の隆運と卒業生諸氏の栄達を知るあらば、翁は必ずや手を拍ち、巨眼を輝かして善哉（よきかな）々々を叫ぶであらう。

草枕旅ゆく人も行き触らばにほひぬくべくも咲ける萩かな

「萬葉集」

昭和十七年十二月五日発行

編纂兼

高知市春野町五十九

発行人

川崎幾三郎翁伝刊行会代表者

川島 正件